

# 『台湾医学に尽くした一人の日本人医師の明治、大正、昭和史』

周南地域・郷土人物史（その1）北原正知医師の足跡

## 紙矢健治、李岳道、于蕙清

分類：220東洋史

キーワード：台湾医学、周南地域・北原正知

### I. はじめに

筆者1（紙矢健治）は、2018年4月29日（日）に放送された『明治を背負った男 児玉源太郎』（KRY山口放送株式会社）の取材協力のさいに、山口県出身の人物、例えば、台湾で1932年末に現在の岩国市出身の重田榮治が台北市に菊元デパートを、現、山口市出身の林方一が台南市にハヤシ百貨店を競って開業した時代を知ることができた。台湾統治の象徴とも言える近代デパート産業を山口県人がつくりあげたことに、静かな誇りを感じる。この偉業は、山口県人としては山口県史に残るきわめて意義深い歴史である。台南のハヤシ百貨店については、すでに2016年11月に2回にわたって番組が山口放送で放送された。また2017年12月には菊元デパートを創立した重田榮治に関連する論文も発表、出版された。この作業を進めるにあたって、筆者2（李岳道）と筆者3（于蕙清）に資料の収集、また全体の構成についても共同作業を進めたので、今回、周南地域・郷土人物史として北原正知医師をとりあげるにあたり、引き続き本稿を3人による共著とした。

筆者1（紙矢）は徳山大学経済学部教授である。国立中山大学中山学術研究所（現、社会科学院中国與亜太研究所）碩士（1991-1993）、香港珠海学院文学院中国歴史研究所（1998-2001）文学博士であり、専攻は中国近代史である。和春技術学院（1993-1995）、南台科技

大学（1995-1997）、国立高雄餐旅大学（1997-2010）を経て徳山大学に着任した。現在は児玉源太郎を始め、台湾とゆかりのある人物史を研究している。筆者2（李岳道）は香港珠海学院文学院中国歴史研究所博士候補人・高雄医学大学兼任講師であり専攻は台湾史である。筆者3（于蕙清）は国立中山大学社会科学院社会科学博士であり、現在は正修科技大学通識教育中心専任教授である。専攻は中国・アジア研究全般である。また中国・台湾双方で高く評価されている中国書家の于大成教授の長女である。


### II. 一人の医師の明治、大正、昭和と地元医療への貢献

情け深い医師であった北原正知先生（以下、北原医師とする）。現在の光市中村住宅に住んでいた杉尾一郎氏は、「海岸の岩場で転んで頭をけがした時、北原先生が自宅まで往診してくださいました。飛んでこられたという記憶があります」と言う。浅江在住の窪川実津江氏は「当時、浅江には北原医院ともう一つ、大谷医院という二つの診療所があって、北原先生は人情が厚くて、やさしい先生でした」という。今でも北原医師は浅江の人々の記憶に鮮やかに残る。平成5年8月に出版された『光市医師会創立50周年記念誌』には、戦後の北原医師の足跡とその貢献が記されている。日本国内で公開されている資料としては、これはきわめて貴重なものである。

台北の旧台湾総督府文書<sup>もんじょ</sup>には、今でも北原医師に関する文書が41項目約50点が保管され、

戦後おびただしい文書が焼却処理され歴史が消された日本(内地)とは異なり、北原医師の足跡が鮮やかに浮かび上がる。

終戦後、外地(旧植民地を含む)からの引き揚げは段階的に行われた。台湾からは約48万人の内地出身者が、1946(昭和21)年から2年間かけて段階的に引き揚げてきた。北原医師は、引揚げ開始後、岩国保健所、柳井国保、光浅江国保診療所長に就任し、光市での定住にはまさに運命的な「出会い」があったのだろう。近隣では広島県大竹や宇字が近隣の引き揚げ受け入れ港であり、医師としての引き揚げ、それは終戦直後の混乱期においては、すぐにその場所に定着して医道に服務することが求められた時代であった。北原医師は、故郷の熊本には向かわず、岩国、柳井、光へと転属した後、引揚げから9年後に現在の光市浅江で開業した。

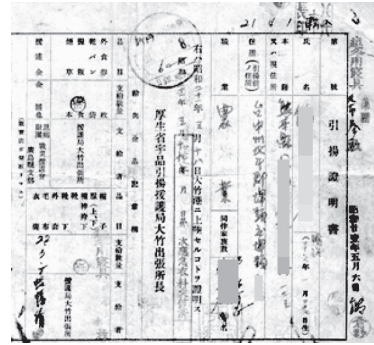


**21. 北原正知先生**

明治31年10月25日

**出身地** 熊本県玉名郡  
**開業地** 光市浅江  
**略歴**  
 大正9年熊本医専卒  
 その後台湾花蓮港、高雄、屏東市の病院外科部長を経て、台湾屏東市で開業  
 昭和21年岩国保健所、柳井国保、光浅江国保診療所長  
 昭和30年6月光市浅江にて開業(内・外)  
 昭和31年～32年光市医師会副会長  
 昭和41年～42年光市医師会副議長  
**趣味** テニス、囲碁、弓道  
**御逝去** 昭和47年1月18日(73才)  
**御遺族** 光市浅江■■■■様

(写真1) 北原正知先生プロフィール  
 (出所)『光市医師会創立50周年記念誌』  
 (平成5年8月出版)、p78。

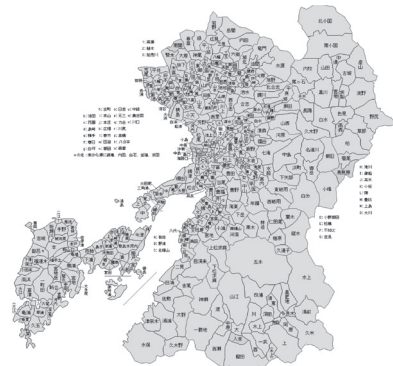


(写真2)終戦時の引き揚げ証明書の例

### Ⅲ. 北原医師のおいたち、そして台湾へ

2015年8月、筆者1(紙矢)に運命的な出会いがあり、北原医師の存在を知った。それを受けて台湾屏東地区の人々に当時の様子を知る人を探した。北原正知医師は1898(明治31)年10月25日、熊本県玉名郡緑村で生まれた。その年は奇しくも児玉源太郎が第4代台湾総督として台湾に赴任した年である。玉名郡緑村とは、現在の玉名郡和水町である。熊本県と言っても一番北、福岡県との県境にあり、すぐ北隣は、現在のみやま市と八女市であり、福岡県久留米にも比較的近い場所であった。それにしても明治時代の行政区域は、大変細かいもので、かろうじて県庁所在地である熊本市だけが唯一市政を敷いていた。

(地図1)熊本県地図1898年



(出所)パラパラ地図熊本県<http://mujina.sakura.ne.jp/history/43/index2.html>より引用。

北原医師は1916（大正5）年3月、旧制熊本県立鹿本中学校を卒業した。写真3は総督府文書に残っている北原医師の履歴である。これを見ると1937(昭和12)年までの先生の足どりがわかる。

北原医師は、鹿本中学(旧制)、熊本医事専門学校(現、熊本大学医学部)に進み、医師となった。旧鹿本中学とは現在の鹿本高等学校(現、山鹿市)である。北原医師は1920(大正9)年5月、熊本医学専門学校を卒業、翌月6月、ただちに台湾のマラリア防濁事務を囑託され、台湾の南端ガラピを含む阿緞廳(現在の屏東)に赴任した。

この年、台湾総督府は児玉源太郎総督による20庁(1901-1909)、佐久間左馬太総督による12庁(1909-1920)の地方自治単位を五州三庁(台北州、新竹州、台中州、台南州、高雄州、花蓮港庁、台東庁、澎湖庁)に再編し、いよいよ日本統治は定まった。北原医師は、この台湾統治の再編を見届けると、一旦、久留米歩兵第56連隊に入営し、翌1921（大正10）年12月30日、陸軍二等看護長に任ぜられ退営した。その後、終戦までの四半世紀の長きに渡り台湾で働くことになったのである。

写真3は、北原正知の履歴表である。表には縦書きで、氏名「北原正知」、生年「明治二十九年三月」と記載されている。履歴は、鹿本中学校卒業、熊本医事専門学校卒業、そして台湾各地の勤務歴が詳細に記されている。表の右側には「北原正知」という大きな文字で名前が記されている。

(写真3) 北原正知履歴 (台湾国立博物館所蔵)

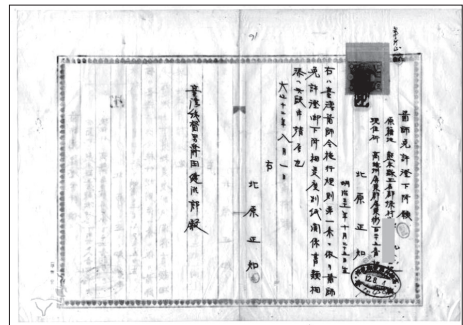
#### IV. 医師としての台湾での足跡

1922（大正11）年1月4日に台湾台北医院の整形外科、理学治療科勤務となった(月給

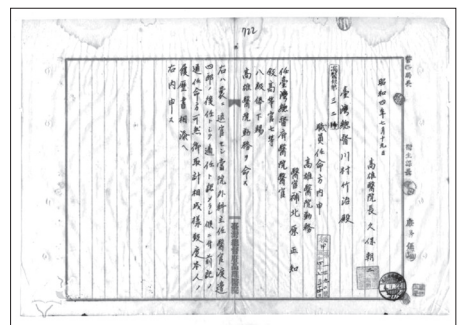
107円)。その後、5月30日付で台湾総督府に任官し、総督府医院医官補となった(月給70円)。そのまま台北医院に勤務、1923（大正12）年3月25日付で屏東医院に赴任した。

裕仁親王(当時、摂政宮)の台湾行啓時の1923(大正12)年から屏東医院に台湾総督府医官補として勤務し、1929(昭和4)年に医官として成立したばかりの高雄医院に赴任、1930(昭和5)年にいったん東海岸の花蓮港医院5年弱勤務した後、1935(昭和10)年に再び屏東医院に帰任した。

高雄医院の久保朝二院長が台湾総督府の川村竹治総督に提出した人事記録が残っていた。(写真4参照) 1931（昭和6）年11月には、花蓮港医院の院長代理を務め、花蓮港全域(現、花蓮県)の医学の最高権威者として現地に勤務した。実に33歳の若さでのことだった。



(写真4)台湾総督府医師免許取得文書



(写真5) 北原正知高雄医院 (台湾総督府医官昇進文書)

(表1)台湾総督府文書 北原正知関連文書一覧

| No. | 年(元号) | 西 曆  | 事 柄          | 肩書(文書)   |
|-----|-------|------|--------------|----------|
| 1   | 大正十一年 | 1922 | 医院 台北医院      | 医官補 162  |
| 2   | 大正十二年 | 1923 | 北原正知警務局理蕃課   | 囑託 65    |
| 3   | 大正十二年 | 1923 | 医院 屏東医院      | 医官補 171  |
| 4   | 大正十三年 | 1924 | 警務局理蕃課       | 囑託 68    |
| 5   | 大正十三年 | 1924 | 医院 屏東医院      | 医官補 174  |
| 6   | 大正十四年 | 1925 | 警務局理蕃課       | 囑託 54    |
| 7   | 大正十四年 | 1925 | 医院 屏東医院      | 医官補 186  |
| 8   | 大正十五年 | 1926 | 警務局理蕃課       | 囑託 59    |
| 9   | 大正十五年 | 1926 | 医院 屏東医院      | 医官補 195  |
| 10  | 昭和二年  | 1927 | 警務局理蕃課       | 囑託 62    |
| 11  | 昭和二年  | 1927 | 医院 屏東医院      | 医官補 204  |
| 12  | 昭和三年  | 1928 | 医院 屏東医院      | 医官補 222  |
| 13  | 昭和四年  | 1929 | 医院 高雄医院      | 医官 235   |
| 14  | 昭和五年  | 1930 | 医院 花蓮港医院     | 医官 276   |
| 15  | 昭和六年  | 1931 | 医院 花蓮港医院     | 医官 285   |
| 16  | 昭和七年  | 1932 | 医院 花蓮港医院     | 医官 282   |
| 17  | 昭和八年  | 1933 | 医院 花蓮港医院     | 医官 292   |
| 18  | 昭和九年  | 1934 | 医院 花蓮港医院     | 医官 304   |
| 19  | 昭和十年  | 1935 | 醫院 屏東医院      | 医官 314   |
| 20  | 昭和十年  | 1935 | 高雄州州立屏東高等女学校 | 校医 596   |
| 21  | 昭和十一年 | 1936 | 医院 屏東医院      | 医官 334   |
| 22  | 昭和十一年 | 1936 | 高雄州州立屏東高等女学校 | 校医 629   |
| 23  | 昭和十二年 | 1937 | 高雄州屏東市会議員    | 市会議員 662 |
| 24  | 昭和十二年 | 1937 | 高雄州州立屏東高等女学校 | 校医 669   |
| 25  | 昭和十三年 | 1938 | 高雄州屏東市会議員    | 市会議員 705 |
| 26  | 昭和十三年 | 1938 | 高雄州州立屏東高等女学校 | 囑託 712   |
| 27  | 昭和十四年 | 1939 | 高雄州屏東市会議員    | 市会議員 759 |
| 28  | 昭和十四年 | 1939 | 高雄州州立屏東高等女学校 | 囑託 767   |

|    |       |      |              |           |
|----|-------|------|--------------|-----------|
| 29 | 昭和十五年 | 1940 | 屏東師範学校       | 嘱託 333    |
| 30 | 昭和十五年 | 1940 | 高雄州屏東市市議員    | 市議員 608   |
| 31 | 昭和十六年 | 1941 | 屏東師範学校       | 嘱託 359    |
| 32 | 昭和十六年 | 1941 | 高雄州屏東市参事会員   | 参事会員 661  |
| 33 | 昭和十六年 | 1941 | 高雄州屏東市市議員    | 市議員 661   |
| 34 | 昭和十六年 | 1941 | 高雄州州立屏東高等女学校 | 校医 666    |
| 35 | 昭和十七年 | 1942 | 屏東師範学校       | 嘱託 374    |
| 36 | 昭和十七年 | 1942 | 高雄州州會議員      | 州會議員 695  |
| 37 | 昭和十七年 | 1942 | 高雄州屏東市参事会員   | 市参事会員 705 |
| 38 | 昭和十七年 | 1942 | 高雄州屏東市市議員    | 市議員 705   |
| 39 | 昭和十七年 | 1942 | 高雄州州立屏東高等女学校 | 嘱託 711    |
| 40 | 昭和十九年 | 1944 | 高雄州州會議員      | 州會議員 316  |
| 41 | 昭和十九年 | 1944 | 高雄州州立屏東高等女学校 | 嘱託 332    |

(出所)台湾総督府文書の中に残る北原正知医師に関する文書(筆者作成)

## V. 北原医師と高雄州屏東市との縁

北原医師は1923(大正12)年から1929(昭和4)年までの5年余り、加えて1935(昭和10)年から終戦までの15年余りを屏東市で過ごしている。



(地図2) 屏東県の位置Google地図より

屏東市は日本統治時代、高雄州に属する。戦後では、屏東県となり、人口は県全体で約84万人、面積は2,775平方キロメートルである。

ここに1枚の写真(写真6)がある。日本統治時代において2,000枚ほど残った医療関係者の第1769番の写真である。まさに若き日の北原医師の写真である。



(写真6) 符合医療写真所蔵品 (総統府中央研究院 デジタル文化センター所蔵)

このころ北原医師の医学的な大きな貢献があったことを中国の医学者が高く評価している。中国山東省の『沂水医専学報』(1982年01期)に一編の腓腹筋頭種子骨(ファベラ)に関する論著「中国成年腓腸肌籽骨の放射片観察」が発表された。発行は同年であるので、執筆は1981(昭和56)年以前に行われたと推察される。北原医師が逝去してから9年の歳月が経ってからのことである。管見の範囲では、中国の医学的な権威者のファベラについて記述した論著はあまり多くなく、引用したのは青島大学医学院の86歳になる丁士海教授である。今から約40年前の論著の主要な根拠となったのが、北原医師の「台湾蕃人のFafellaのX線的観察」『台湾医学会誌』(VOL34, 昭和10年)だった。意外にも台湾ではなく中国の医学界の重鎮とも言える医師である丁士海教授が、若きころの北原医師の論著を貴重な資料として中国の地で渾身の論著の論拠とし

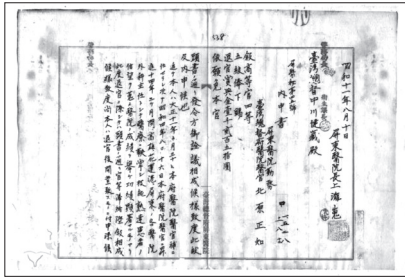
て引用元したことは、歴史的意義があると言える。恐らく北原医師自身、自ら書いた論著が中国の医学者によって蘇ることなど思いもつかなかったであろう。1978(昭和53)年12月に開催された中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議、つまり「三中全会」の3年後で、改革開放に向かう鄧小平が暗に批判した陳雲の「鳥籠論」が出た年でもあるので丁士海教授の論著執筆には、相当高い精度がなければ、改革開放が始まったばかりの中国では、まして台湾統治時代の北原論文を引用すること自体、冒険的勇気が必要であった。丁士海教授という気骨のある医学者によって、中国医学界で北原医師が昭和10年以前にまとめた研究成果が時代を超えて蘇った瞬間であった。

## VI. 一つの転機

1936(昭和11)年、時代が変わる世相を誰もが感じた一年だった。1月、日本はロンドン海軍軍縮会議から脱退し、2月には226事件が起きた。軍国主義的な世相が日本社会を覆いはじめたが、台湾ではまだ平和な時代がつづいていた。その年、北原医師は一つの決断をした。地元屏東市で個人医院を開業する準備を進めたのである。開業後、屏東の高雄州州立屏東高等女学校と屏東師範学校の嘱託医(校医)もつとめた。そして高雄州屏東市会議員になるのは、その翌年の1937(昭和12)年のことであった。

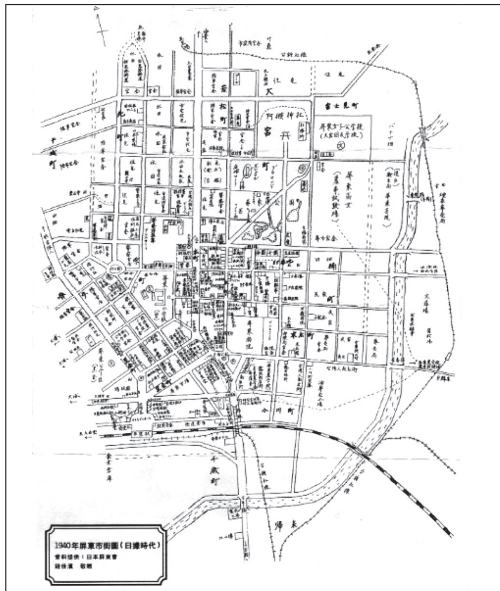
1936(昭和11)年8月10日。屏東医院の上瀧崑院長から台湾総督府の中川健蔵総督に一通の内申書が出された。それは北原医師の開業に関するものだった。北原医師の当時の肩書は「台湾総督府医院医官 屏東医院勤務」であり、高等官四等(5級俸)という高位にあった。総督府公務員としての退官賞與金1,250

円の記載があり、換算すると現在の500万円ほどに相当するとみられる。



(写真7)北原医師の退官についての屏東医院長から台湾総督府に出された内申書

本文書は、「叙高等官四等 五級俸下賜 退官賞與金壹千貳百五拾圓 依願免本官」との表題での内申書である。優秀な医師であったことがわかる。



(地図3)高雄州屏東市地図

(北原医師の住居である旧若松町一帯の様子が詳細に記録されている。http://e050.dgblog.dreamgate.gr.jp/e120204.htmlより引用した。)

本人ハ大正11年5月30日、本府(台湾総督府)医官補二任ゼラレ、次テ昭和4年8月16日、本府医院医官に昇進14年2ヶ月間、高雄、花蓮港、屏東ノ各医院外科主任として医療ニ軌掌シ技能熟達患者ノ信望ヲ蒐メ医院ノ成績ヲ挙ケ功績顕著ナルモノアリ。此度退官ニ際シテハ願書ノ通り官等俸給陞叙相成候様致度尚本人ハ退官後開業致スモノニ付申添候。

(昭和11年8月10日文書)

経歴 (21.北原正知) の記載に、台湾屏東市で開業した時期は、1936(昭和11)年秋とある。

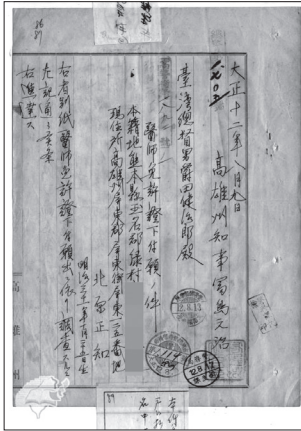
医療写真所蔵品(第1769番)の北原医師の住所は「屏東市若松町一丁目二番」とある。

現在の若松町一丁目二番は「国泰建設中山公園家」という7階建てのビルとなっている。屏東市で開業した時期は、この場所に住まいがあり、ここで開業していたと考えられるが、この区画だけは、当時の家屋はすでに取り壊されて今の状態になっている。(写真8)



(写真8)2017年12月撮影

写真9は、時代は遡るが1923（大正12）年8月9日に出された台湾総督府医師免許澄下附願である。富島元治高雄州知事から田健次郎総督宛に出された文書である。これは写真4の「台湾総督府医師免許取得文書」を受けて出された公文書である。



(写真9)富島元治高雄州知事から田健次郎総督宛に出された文書

『台湾総督府官報』（昭和18年1月8日金曜日）第227号 告示

高雄州制第10条ノ規定ニ依リ任命シタル州会議員ノ住所及氏名左ノ如シ  
昭和18年1月8日 台湾総督 長谷川清  
高雄州屏東市若松町一丁目十一番地 北原正知

この場所は、写真10の場所の可能性がきわめて高く、この一帯が北原医師の日常生活の場所であったと推察できる。



(2017年12月撮影)

## VII. 高雄州屏東市と北原医師

高雄州庁が所管する屏東市は、1933（昭和8年）に成立した。写真9などの文書がやりとりされた時期は、高雄州屏東街と呼ばれた時期で、1920（大正9）年10月から1933（昭和8）年9月までの呼称である。北原医師はその後、1936（昭和11）年に退官し、開業ののちは1937年（昭和12）年には屏東市会議員になり、記録によれば1942（昭和17）年までつとめ、同年には高雄州会議員となり、医療の分野だけでなく政治的な貢献も始めることになる。1941（昭和16）年には屏東市参事会員もつとめ、終戦時には高雄州会議員、屏東市参事会員（参事）であった。

1943（昭和18）年の州会議員の任命のさいの官報記載内容は、高雄州屏東市若松町一丁目十一番地であった。

現在では370万人の人口規模を持つ旧高雄州（現、高雄市・屏東県全域）を所管する議員をされながら地域医療に尽力した北原医師は、光市の地においても情け深い医師としての顔を残した。1972（昭和47）年1月18日に73歳という若さで逝去した北原医師。旧高雄州の人々、先住民の人々の健康に心をくたく人生を歩んだ一人の非凡なる医師としての姿を垣間見た筆者は、やはり個々人の生活実体験とその足跡を可能な限り客観的に個人史としてきちんと整理しながら保ち続けることの価値を強く感じた。

## VIII. おわりにかえて

北原医師は、前述の通り終戦後内地へ引揚げてから、その場所、山口県で定住し、1946



(昭和21)年からは岩国保健所、柳井国保診療所、光浅江国保診療所長などを歴任し、昭和30年に光市浅江に開業された。復員してきた場所と時期については資料を探しているが、字品が大竹であったと推察される。眼前の窮状をうれしい医師としてできる限りのことをしたにちがいない。

台湾の医療に奉職され、また教育の現場で校医もつとめ、屏東市会議員、高雄州会議員、屏東市参事をつとめあげた一人の誠実な人物史を本稿においてある程度高い精度を保ちながらまとめられたことをうれしく思う次第である。

筆者1(紙矢)は日本の山口県人、筆者2(李)は台湾本省人、筆者3(于)は台湾外省人であるが、北原医師の歴史を共にみつめる時、そこには同じ生身の人間としてその時代を生きた誠実な日本人像が見えた。筆者らは、スマホ文化と引き換えに、児玉源太郎以来受け継がれてきた勤勉、まじめ、義理堅いという日本精神をあっさり失ってしまった今の時代の日本に、共に手をつなぎ、かつての日本人像がいかなるものであったのかを伝えたいと思ったし、紙幅の関係で本稿では書ききれなかったさらに尊い事物については、別の機会に引き続き紹介したいと考えている。日本も欧米には及ばず、明治・大正・昭和初期は苦難の連続であったが、日本統治時代の台湾の医療に尽くした北原医師の足跡を日本人、

台湾本省人、外省人の3人が心を一つにして、究明しようとした執筆の意図を現代の人々にわかってもらいたいと思うこと限りない。

#### 謝 辞

本稿の完成には、筆者1(紙矢)が正修科技大学でのシンポジウム「宗教生命關懷国際学術研討会2017」の基調報告に招待されたことが、直接的なきっかけとなった。このチャンスがなければ、おそらくは本稿はまとめることはできなかった。龔瑞璋校長をはじめ正修科技大学の各位にお礼申し上げたい。

#### 参考文献

- 丁士海「中国成年腓腸肌籽骨の放射片観察」『沂水医専学報』(1982年01期)  
北原正知「台湾蕃人のFafellaのX線の観察」『台湾医学会誌』(VOL34、昭和10年)  
光市医師会編『光市医師会創立50周年記念誌』(平成5年8月出版)  
国史館台湾文献館各写真資料 著者2、3が収集した。

#### 筆 者

- 紙矢健治 (徳山大学経済学部教授)  
李岳道 (香港珠海学院文學院博士候補人)  
于蕙清 (正修科技大学通識教育中心専任教授)

Author

Kenji Kamiya.

Yueh-Tao Lee

Huiching Yu